

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：16401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12633

研究課題名(和文) 武道の授業によって生徒の「心」を育む：小規模校で実践する新たな剣道授業の効果

研究課題名(英文) Fostering students' minds through martial arts classes: effects of new kendo classes practiced in small schools

研究代表者

矢野 宏光 (YANO, HIROMITSU)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：90299363

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：2012年度から義務教育で武道が必修化され、すべての中学校において武道の授業が実施されている。武道の理念とは武技の修練によって心を磨き人格を形成する事であり、これを現代の学校教育において行う事が求められている。だが、これまでの先行研究において、武道授業によって「生徒の心が育った」という学術的データはほとんど存在していない。そこで本研究では、剣道授業によって自己効力感、自尊感情、達成動機を高める事ができるかを検証する事を目的とした。

本研究の結果、小規模校で実施した剣道授業の実施によって、生徒の自己効力感、自尊感情、達成動機が長期的・短期的にも肯定的に変化し剣道授業の心理的効果が認められた。

研究成果の概要(英文)：Martial arts have been compulsory in compulsory education from 2012, so classes in martial arts are being implemented in all junior high schools. The philosophy of martial arts is to refine the mind through martial arts and to form one's personality, which is required in modern school education. However, in previous studies so far, there are few scholarly data that provide evidence that "minds of students grew" by martial arts classes. Therefore, in this research, we aimed to verify whether self-efficacy, self-esteem, achievement motive can be enhanced by Kendo class.

As a result of this research, it was confirmed that the self-efficacy, self-esteem, and achievement motive of students changed positively even in the long term and short term by the implementation of Kendo classes conducted at a small schools, and the psychological effect of the Kendo class was recognized.

研究分野：運動心理学

キーワード：剣道授業 小規模校 達成動機 自己効力感 自尊感情

1. 研究開始当初の背景

2012 年度から義務教育で武道が必修化され、すべての中学校で武道の授業が実施されている。だが、ほとんどの小規模校では武道専門教員がいないこともあり、その授業内容は技術習得に終始した画一的な内容が中心となっている。しかし、これでは学習指導要領に記載されている武道授業のねらいである「自他に対する尊重の念」を育てることが十分ではないと考えられる。

武道の理念とは、武技の修練によって心を磨き人格を形成することにある。すなわち、武道によって「心を育てる」ことを現代の学校教育においてどのようにして実践するかがきわめて必要な課題であると言える。

このように、武道の理念や学習指導要領では、武道の授業実践によって技術的側面のみならず、心理面への効果も期待されている。しかしながら、これまでの先行研究において、武道授業によって「生徒の心が育った」という学術的データはほとんど存在していない。

2. 研究の目的

本研究では、剣道授業の実践を通して、自己効力感(『できる』という見込み感)と自尊感情(自己に対する肯定的な評価)を育て、達成動機(新たに何かを成し遂げようとする意欲)が高まることを、心理学的方法論を用いて実証する事が目的であった。

また、研究の実施においては、申請者が考案・試行している「CAM: 達成動機の高まりに主眼をおいたスポーツ心理学講義と剣道講習を一連の流れの中でプログラム化した講座」(矢野, 2011; 2012) (Fig.1) を小規模校で行う剣道授業に用いることで、CAM の特徴を明らかにし、今後より効果的に指導場面へ適用する可能性を検討することも併せて目的とした。

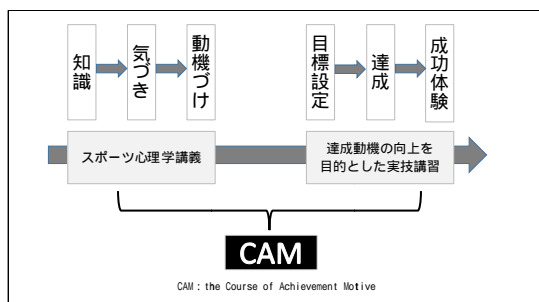


Fig.1 CAM の概要 (矢野, 2011)

3. 研究の方法

【2015 年度 (1 年目)】

(1) 剣道授業が生徒の心理的側面に与える影響を調査するため、以下の事項について実施・検討した。

1) 小規模校の特徴を明確にするため、小規模校と中規模校 (適正規模校 A) との比較を行った。

2) 剣道授業の特徴を検証するため、他の体育種目 (陸上競技・ダンス) との比較を行った。

3) 高知県内の小規模校 (小規模校 C) において剣道授業に CAM を実施し、その効果を調査した。

4) 小規模校 A において剣道具を用いた一般的な剣道授業を実施し、その効果を調査した。

5) 小規模校 B において木刀を使用した剣道授業を実施し、その効果を調査した。

【2016 年度 (2 年目)】

1) 小規模校 A において CAM を実施し、経験者と未経験者に着目して CAM の効果を調査した。

2) 小規模校 B において木刀を使用した剣道授業を実施し、経験者と未経験者に着目して木刀による剣道授業の効果を調査した。

【2017 年度 (3 年目)】

1) 小規模校 A において実施した CAM の効果検証を行った。

2) 小規模校 B において実施した木刀を使用した剣道授業の効果検証を行った。

3) 2016 年度と 2017 年度の 2 年間の経年変化分析から、CAM 及び木刀による剣道授業の効果検証を行った。

(2) 剣道授業の評価に用いた指標

量的評価指標として、達成動機測定尺度 (堀野・森, 1991)、一般性自己効力感尺度: GSES (General Self-Efficacy Scale) (坂野・東條, 1989)、自尊感情尺度 (山本ら, 1982)、心理的ストレス反応尺度: SRS-18 (Stress Response Scale-18)、日本語版 POMS2 (Profile of Mood States2) 短縮版-青少年用、を用いた。また、質的評価指標として 気づきシート、ヒアリングシート、を使用した。

4. 研究成果

2015 年度 (1 年目) の結果

(1) 小規模校の特徴

小規模校の特徴を明確にするため、小規模校 (小規模校 C) と中規模校 (適正規模校 A) との比較を行った。この結果、小規模校の生徒の達成動機が中規模校よりも有意に低いことが判明した。これまで、小規模校の教員とのヒアリングの中で頻繁に耳にした「意欲の低さ」が改めて確認された (Fig.2)。

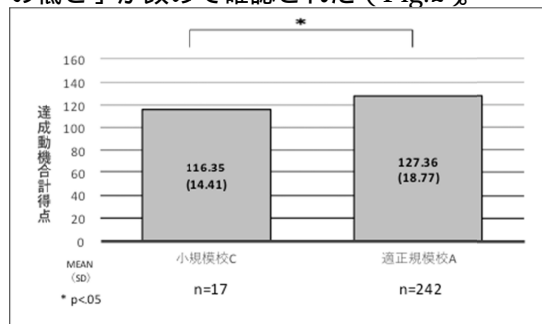


Fig.2 達成動機合計得点における小規模校と中規模校での比較

(2) 剣道授業の特徴

剣道授業の特徴を明確にするため、剣道授業と剣道以外の体育種目(陸上競技・ダンス)との比較を実施した。その結果、剣道では授業の初回と最終回で有意(5%水準)に達成動機の高まりが認められ、剣道以外の体育種目では、有意差は検出されなかった。しかし、分析データを詳細に分析すると、剣道授業の開始前の達成動機は他の種目に比して極端に低く、これが本調査で検出された有意差の原因となっていると推測された(Fig.3)。

すなわち、本研究で得られた知見は、剣道授業による達成動機の上昇というよりは、生徒が初めて行う剣道授業へ向けられたネガティブな心理的影響であると考えられた。

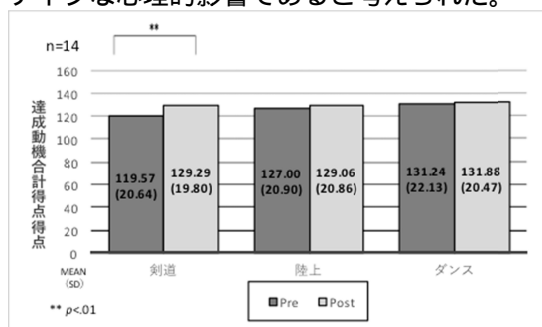


Fig.3 各種目間における達成動機合計得点の単元前後での変化

(3) CAMの効果の検証

小規模中学校(対象校C)において、CAMを用いて剣道授業を実施した。その結果、剣道の授業を受講した生徒の自尊感情、自己効力感、達成動機の得点は、授業後に高まったことが確認された。特に生徒の自己効力感、初回の授業に比べ最終回の授業で有意に高い傾向を示した。CAMの有効性が検証された。

(4) CAMの一過性の効果

1回のCAM授業内で変化する一過性の心理的反応を、心理的ストレス反応尺度(SRS-18)とPOMS2を用いて調査した。その結果、生徒のストレス反応(抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力)は、授業後に有意に低下することが確認された。さらに、POMS2短縮版を用いて生徒の授業前後での気分の変化を調査・分析した結果、AH(怒り-敵意)、CB(混乱-当惑)、TA(緊張-不安)、TMD(総合的な気分状態)の4因子において、ネガティブな気分が有意に改善されたことが判明した。

(5) 剣道用具を用いた一般的な剣道授業の効果

剣道用具を用いた一般的な剣道授業(小規模校A)によって生徒の達成動機、自己効力感、自尊感情がどのように変容するかを調査した。その結果、達成動機合計得点及び達成動機を構成する二因子(自己充實的達成動機、競争的達成動機)が有意に高まることが判明

した。また、自己効力感が高まる傾向が認められた(10%水準)。自尊感情に変化はなかった。

(6) 木刀を使用した剣道授業の効果

木刀を使用した剣道授業(小規模校B)によって生徒の達成動機、自己効力感、自尊感情がどのように変容するかを調査した。その結果、自尊感情が有意に高まった(5%水準)。また、達成動機合計得点及び達成動機を構成する因子である自己充實的達成動機が上昇傾向を示した(10%水準)。自己効力感も高まりをみせたが有意差を検出するまでには至らなかった。

2016年度(2年目)の結果

2015年度(1年目)の研究結果から、小規模校の生徒の達成動機が中規模校よりも有意に低いことが判明している。そこで、本年度の研究においては、剣道授業が小規模校の生徒の心理的変数にどのような影響を与えるかを調査し、小規模校の特性に即した剣道授業内容を構想することを目的とした。以下に本研究から得られた知見を示した。

(1) 経験者と未経験者に着目したCAMの効果分析

剣道用具を用いた剣道授業(小規模校Aで実施したCAM)において、剣道授業期間の前後の比較分析から、生徒の達成動機、自己効力感、自尊感情のすべてに上昇が認められた。また、剣道授業経験者(2・3年生)は未経験者(1年生)よりも達成動機合計得点及び自己充實的達成動機の向上が顕著であった。すなわち、CAMはすでに一般的な剣道授業を経験した生徒の達成動機の向上により効果的に作用する可能性が示唆された。

(2) 経験者と未経験者に着目した木刀による剣道授業の効果

木刀による剣道基本技稽古法による効果を検証するために、剣道授業経験者と未経験者に分けて達成動機、自己効力感、自尊感情の変化を調査した。その結果、木刀による剣道授業未経験者(1年生)の達成動機と自己効力感、授業初回には非常に低かったが、授業が進行する中で高まり、剣道授業最終回では剣道授業経験者(2・3年生)との間にほとんど差がなくなった。これは、授業進行の中で自身の技術習得に関して効力感を強めたと推察できる。一方、すでに木刀による剣道形の順序や内容を習得し個々に効力感を得ていた剣道授業経験者は、2年目にはさらに基本動作のみならず質の向上に焦点化することで、自身の未熟さを感じそれが要因となり剣道授業未経験者ほどには心理的変数が上昇しなかったと推察された。

2016年度の研究結果を総括すると、CAMを用いた剣道授業、木刀による剣道授業いずれにおいても、剣道授業初回より剣道授業最終回の方が、生徒の達成動機、自己効力感、自尊感情の上昇が確認された。このことから、小規模校で実施した剣道授業によって、生徒

の心理面が肯定的に変容したことが明確となった。また、CAM の効果は一般的な剣道授業を経験したことがある 2・3 年生の達成動機を高めるためには効果的であることが判明した。

2017 年度（3 年目）の結果

本研究の最終年度である 2017 年度は、小規模校で実施する剣道授業が生徒の心理的変数にどのような影響を与えるかを経年変化も踏まえて分析・検討することを目的とした。以下に本研究から得られた知見を示した。

(1) CAM の効果の検証

剣道授業期間前後（小規模校 A）の比較分析から、生徒の達成動機、自己効力感に有意な上昇が認められた（1%～5%水準）。また、1 回の剣道授業前後での一過性の変化では、心理的ストレス反応、抑うつ・不安、無気力が有意に低減した。さらに、POMS 2 尺度内の DD（抑うつ—落ち込み）、FI（疲労—無気力）、TA（緊張—不安）は有意に低下し、一方で VA（活気—活力）が有意に上昇した。すなわち、CAM を用いた剣道授業によって、生徒の達成動機と自己効力感は増加し、一過性の心理的効果も確認された。

(2) 木刀による剣道授業の効果の検証

木刀による剣道基本技稽古法を用いた剣道授業期間前後（小規模校 B）の比較分析から、生徒の達成動機が有意に上昇したことが判明した（1%～5%水準）。また、1 回の剣道授業前後での一過性の変化では、ストレス度、抑うつ・不安、無気力、不機嫌・怒りが有意に低減した。さらに、POMS2 尺度内の AH（怒り—敵意）、CB（混乱—当惑）、DD（抑うつ—落ち込み）、FI（疲労—無気力）、TA（緊張—不安）が有意に低下した。すなわち、木刀を用いた剣道授業によって、生徒の達成動機は有意に増加し、一方でネガティブな感情は低減したことが確認された。

(3) 経年変化に着目した分析

2016 年度と 2017 年度の 2 年間の経年変化分析から、CAM あるいは木刀による剣道授業のいずれにあっても、2016 年度に比して 2017 年度の方が達成動機、自己効力感が増加したことが確認された。

【考察】

1. 剣道授業の効果について

本研究では、「剣道具を使用した剣道授業」、「木刀による剣道基本技稽古法」、「CAM」の 3 種類の剣道授業を実施した。すべての剣道授業において、小規模校の生徒の達成動機、自己効力感、自尊感情は授業の進行とともに高まることが確認された。このことから、剣道授業が生徒の心理面の肯定的な変容に寄与すると考えられた。

木刀による剣道基本技稽古法を用いた剣道授業では、剣道授業未経験者の、達成動機（自己充實的達成動機、競争的達成動機）が、剣道授業開始前には剣道授業経験者に比べ

低い傾向にあった。しかし、剣道授業の進行に伴い、剣道未経験者の達成動機は上昇し、剣道授業終了時には、剣道授業経験者との間には差が見られなくなった。このことから、木刀による剣道基本技稽古法の特徴として、1 年目の方が 2 年目よりも達成動機（自己充實的達成動機、競争的達成動機）の高まりは顕著であったことがわかる。1 年目には、形の方法や順番を間違えることなく成功体験を感じていたが、2 年目になると形の手順だけでなく、相手と息を合わせるなどの「質」を求めていくことで、同じ「めあて」であっても難易度は高くなることから、成功体験を感じるものが減少したと推察される。これらのことから、木刀による剣道基本技稽古法は、2 年目よりも 1 年目の方が、心理的変数の上昇が顕著であることが示された。

CAM を用いた剣道授業では、剣道授業経験者は剣道授業未経験者よりも、達成動機合計得点及び自己充實的達成動機の平均値が高い水準で上昇していることが確認された。剣道授業経験者は、1 年目に剣道授業を経験していることで、剣道実技の内容を理解している。そのため、心理学講義の中で「自己の可能性」や「できるとして課題に挑戦することの重要性」などを教示されることによって、剣道実技への動機づけが高まったと推察される。しかし、剣道授業未経験者である 1 年生は、剣道授業がどのようなものが不明確であることや初めて行う剣道への不安や苦手意識により、心理学講義が剣道実技への動機づけに直接的に繋がらなかったと考えられる。これらのことから、1 年目に剣道授業を経験している 2・3 年生の方に、CAM の効果が顕著に現れたと推察された。

【結論】

3 年間にわたる本研究の結果から、小規模校で実施した剣道授業の実践によって、生徒の心理面は長期的・短期的にも肯定的に変化し、剣道授業の心理的効果は概ね実証されたと考えられる。

本研究では、3 種類の剣道授業を実践したが、3 種類の剣道授業には、それぞれ特徴があり、期待される効果は異なる。そのため、小規模校の特色と小規模校の生徒の心理的特徴を把握し、その実状にあった剣道授業内容と方法を選択することが必要である。それにより、剣道授業がより効果的に生徒の心理面を肯定的に変容させることに寄与できると考えられる。

< 引用文献 >

矢野宏光 (2011). 達成動機の高まりに主眼をおいた新しい剣道指導の可能性 聖カタリナ大学研究紀要第 23 号.

矢野宏光 (2012). “達成動機”を高めること

で、武道の授業は楽しくなる 大修館書店
体育科教育 1月号,10-13.

小川 和真 (OGAWA, KAZUMA)
秋田 裕太 (AKITA, YUTA)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

矢野 宏光 (YANO, HIROMITSU)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・
准教授
研究者番号：90299363

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者